

9/23 小さなことに忠実であれ ルカ 19：11～23

☆聖書箇所      ルカ 19：11～23

11 人々がこれらのことばに耳を傾けていたとき、イエスは続けて一つのたとえを話された。イエスがエルサレムの近くに来ていて、人々が神の国がすぐに現れると思っていたからである。

12 イエスはこう言われた。「ある身分の高い人が遠い国に行った。王位を授かって戻って来るためであった。

13 彼はしもべを十人呼んで、彼らに十ミナを与え、『私が帰って来るまで、これで商売をなさい』と言った。

14 一方、その国の人々は彼を憎んでいたので、彼の後に使者を送り、『この人が私たちの王になるのを、私たちは望んでいません』と伝えた。

15 さて、彼は王位を授かって帰って来ると、金を与えておいたしもべたちを呼び出すように命じた。彼らがどんな商売をしたかを知ろうと思ったのである。

16 最初のしもべが進み出て言った。『ご主人様、あなた様の一ミナで十ミナをもうけました。』

17 主人は彼に言った。『よくやった。良いしもべだ。おまえはほんの小さなことにも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。』

18 二番目のしもべが来て言った。『ご主人様、あなたの一ミナで五ミナをもうけました。』

19 主人は彼にも言った。『おまえも五つの町を治めなさい。』

20 また別のしもべが来て言った。『ご主人様、ご覧ください。あなた様の一ミナがございます。私は布に包んで、しまっておきました。』

21 あなた様は預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取られる厳しい方ですから、怖かったのです。』

22 主人はそのしもべに言った。『悪いしもべだ。私はおまえのことばによって、おまえをさばこう。おまえは、私が厳しい人間で、預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取ると、分かっていたというのか。』

23 それなら、どうして私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうしておけば、私が帰って来たとき、それを利息と一緒に受け取れたのに。』

☆説教      小さなことに忠実であれ

今朝はルカの福音書の 19 章から、このイエスさまの有名な「ミナというたとえ話」ですが、実は私（藤本牧師）は三十数年牧師をしています、ここから説教をしたのは実は初めてなんです。

それで少しゆっくりこの所を見ていただきたいと思います、19 章の 11 節を見てください。

11 人々がこれらのことばに耳を傾けていたとき（ま、ザーカイの話が前に書いてありますよね、と説明）、イエスは続けて一つのたとえを話された。イエスがエルサレムの近くに来ていて、人々が神の国がすぐに現れると思っていたからである。

12 イエスはこう言われた。「ある身分の高い人が遠い国に行った。王位を授かって戻って来るためであった。

と、こういう風に始まります。

エルサレムの近くに来て、そして人々が神の国がすぐに現れるということの期待が高まっていた時期にこの話がなされます。

イエス・キリストが、メシアが、救い主がダビデの都に入るということを、人々はどれ程待ち望んでいたことか。

この時人々は、救い主という存在が、当時のローマ帝国の支配下にあったユダヤを解放する、そしてダビデの王国を再建する救い主を迎えようと、その到来を待ち望んでいました。もちろん弟子たちも同じ気持ちでありました。

で、「いよいよこの時が来た」という時に、話を始めたイエスさまは、これから起こることを次のように、12 節のように仰います。

「ある身分の高い人が（と言うのは、イエスさまのことですね、と説明）、遠い国に（と言うのは、これから十字架にかかり、復活され、天に上られると説明）、王位を授かって（と言うのは、神の右に着座されると説明）——私たちが使徒信条で告白しているとおりですね——そして、最後に再び戻って来る」。

一言で言うと、エルサレムの再建ということにはならないということです。

救い主は十字架にかかる。そして天に昇り、神の右に着座され、そしてやがて戻って来る時に、この世界は新しくされる。

これからイエスさまが話されるこの「ミナのとえ」というのは、一言で、

「私たち信仰者が、主イエスが地上から取り去られ、再び主が来られるまで、どういう姿勢で私たちは生きていくべきか——それを最も端的に表している聖書の箇所」だと思って、一緒に見ていただきたいと思います。

つまり「今の私たちがどのように生きていくべきなのか？」

青年の方々は自分の行く道に、様々な迷いがあることがしばしばですね。

これでいいんだろうか、自分はこの学校でいいんだろうか、この仕事でいいんだろうか、この方向性でいいんだろうか、この人でいいんだろうか？と。

そういう悩みを聞きますと、私（藤本牧師）には羨ましい悩みだと思います。

それは若い方々が莫大な可能性、選択肢を抱えておられるから迷うわけですね。

私のような年齢になりましたら、迷いはないですよ。それは選択肢がない（笑）。  
他の職に今から転職すると言っても、ま、難しいことですし、他の方法で生きるという、  
やりたいことはいくらでもあったとしても、自分の体力・知力、様々な限界を抱えています  
ので、大切なことは元気でいたい、健康でいたい——それくらいのものであります。

もちろん夢を描くということは、「若い人も老人も夢を見る」と聖書（\*\*\*ヨエル 2：28）  
にありますように、夢を描くということは年齢のことではないです。  
希望を生きるということで、神が与えてくださる可能性というのは、最後の最後まで莫大  
でありますので、その可能性に生きるということです。

しかし神の与えてくださる可能性に夢をもって生きることは、「でっかいことをしたい」と  
いうことではないです。

だいたい私たちは、そんなに大きなことはできません。

もちろん世界一という人もいるでしょう。

でも世界一を為し遂げたとしても、やがてそれも抜かれ、やがて引退し、やがて忘れ去ら  
れて行きます。

今朝学んでいますこのたとえが終わりますと、（ルカ 19 章）の 28 節をちょっと見ていただ  
きたいと思いますが、28 節から——

28 これらのことを話してから、イエスはさらに進んで、エルサレムへと上って行かれた。

上って行かれた——とうとうエルサレムに入って行かれるわけですね。

そしてイエスさまがこの地上生涯の最後に近づくにあたって、私たち神を信じる者、主イ  
エスに従う者に残しておきたいと思われた、最大の大切な教訓がここに入っていると思っ  
てください。

それを一言で言えば、「少年よ、大志を抱け」ではないです。それではない。

でっかいことをしなさい、夢見なさいということでもない。

それは、17 節に要約されるこのことばに行き着きます。

17 主人は彼に言った。『よくやった。よいしもべだ。おまえはほんの小さなことにも忠実だ  
ったから、十の町を支配する者になりなさい。』

つまりイエスさまは、「わたしが再び来るまで、あなたがたに残しておきたい一番大切な教え」は、「ほんの小さいことにも忠実であれ」。

さて、三つのポイントでお話したいと思います。

1)「ミナ」という、あまり聞くことのない、このお金の単位です。

新共同訳聖書では「ムナ」ですね。

同じような譬えがマタイの福音書で出て来ます。

マタイの福音書では、「タラント」という単位ですね。これは心共同訳聖書では「タラント」です。

これは似ているような話ですけれども、よく読むと内容が違います。

まずタラントとミナというのは、全然違います。

タラントとミナの下にデナリという単位があります。これはローマの銀貨一枚ですね。

デナリ銀貨一枚というのは、当時の日当に当たるとします。ま、それを単純に四捨五入して1万円という風に考えましょう。ねっ。

1ミナというのは、100デナリですから100万円です。

ここでは100万円の話が出て来る。

マタイの福音書では1タラントですから、1タラントというのは60ミナですので、6000万円です。

すると、同じような話であっても、マタイの福音書とルカの福音書では違うということが解る。

マタイの福音書では、旅立って行く主人は3人のしもべに一人に5タラント、一人に2タラント、そして最後に1タラントですが、

額から言えば、最初の人に3億、次の人に6000万円×2だから1200万？（1億2千万という声）。あ、すいません、1億2千万、そして最後に1タラントの6000万ですね。額が全然違う。

そしてマタイの福音書——ちょっとルカの二つ前がマタイですので——マタイの福音書の25章の15節、ちょっと見ていただきたいと思います。

これはやっぱり独特ですよ。25章の15節——ご一緒に読んでみたいと思います。

<マタイ 25 : 15>

15 彼はそれぞれその能力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人

には一タラントを渡して旅に出かけた。するとすぐに、

と、こうなるわけです。

で、やっぱり一番特色のあることばは、15 節の一番最初に出て来ます。

「主人はそれぞれの能力に応じて」——こう来ます。

ですからよく言われるように、タラントンという通貨単位から、英語のタレントという言葉が出て来ます。タレントというのは賜物ある人です。

私たちは、みんなそれぞれ賜物をいただいています。

でもその賜物というのは、全部神から来るものであって、なおかつそれぞれ特有の賜物をいただいている。

「それぞれの能力に応じて」、最適の賜物を私たちはいただいている。でもそれは自分の力ではなく、神からいただいた力で、

それをどういう風に使うか？ということが私たちに問われている。

みんな、それぞれ神さまから与えられている賜物は違いますもの、それを生かして用いることが求められているわけですね。

ところがルカの福音書に戻っていただいて、19 章をまた見ていただけますでしょうか？

13 節にこうあります。

13 彼はしもべを十人呼んで、彼らに十ミナを与え、『私が帰って来るまで、これで商売をなさい』と言った。

14 一方、その国の人々は……

とありますね、で、15 節に——

15 さて、彼は王位を授かって帰って来ると、金を与えておいたしもべたちを呼び出すように命じた。彼らがどんな商売をしたかを知ろうと思ったのである。

16 最初のしもべが進み出て言った。『ご主人様、あなた様の一ミナで十ミナをもうけました。』

という風に話は始まって行きます。

一番最初にあったように、しもべは十人。そして与えられたのは十ミナですから、これ、みんな平等に一ミナ与えられたという話です。

みんな平等に100万円与えられたという——決して大きな額ではない。

みんな等しく一ミナというのは、私たちの才能や能力や特性の話ではないです。

それは主人から与えられた、等しく与えられたもの、一体何か？と考えますと——

例えば、私たちは同じ信仰を与えられました。私たちは同じ救いにあずかりました。私たちは同じく永遠のいのちをいただきました。等しく主の恵みにあずかっています。

主は、同じ信仰、同じ救い、同じ恵みを私たちに託して、再び戻って来られるまで、あるいは私たちが天国に帰るその日まで、その一ミナを用いることを願っておられるという前提で話が始まっているわけですね。

イエスさまはエルサレムに入る前に、よくよく信仰者である私たちに伝えておきたかったこと——私たちは皆等しく、神の約束を、神のことばを、信仰を、救いを、恵みを与えられているということです。

今日皆さんが礼拝に来られたという時に、今日このみことばを開いたという時、「ほんのわずかなことに忠実であれ」という主の声を聞いた時、皆等しく聞いている。等しく聞いても、そのみことばをどう受け留めるかは、恐らく私たち違って来るでしょうね。

それを受け留めて、どれくらいそのみことばに力を傾けて生きていくか、またそれぞれ違うでしょうね。

でも与えられている信仰、救い、恵み、みことば、祈りの機会——それはみ～んな等しく与えられているということです。

2) それを用いた者の結果は様々でした。

最初の人、1 ミナで10 ミナ儲けた——ま、大した成果だと思います。

でもですよ。主人はそれよりもはるかに大きな報いをくださいました。

17 節の最後、「十の町を支配する者になりなさい」。18 節——

18 二番目のしもべが来て言った。『ご主人様、あなた様の一ミナで五ミナをもうけました。』

19 主人は彼にも言った。『おまえも五つの町を治めなさい。』

1 ミナを10 ミナにした——ま、大した成果だとは思いますが、でも「十の町を治めなさい」と言うのは、少し話が違います。

つまりイエスさまは十ミナという成果にふさわしい褒美をくださったのではない。

一生懸命一ミナを大切に用いたということに主人は感激して、感激のあまりに（笑）、十の町を治めさせようというとてもない（笑）褒美を与えるわけですね。

マタイの福音書5 タラント・3億に比べれば、100万は小さなことかも知れない。

問題は大きな夢を描いて、でっかい働きをすることではなくて、

私たちが等しく小さな信仰、小さなみことば、小さな恵み、神の愛（それらが）与えられていて、でもそれを軽んじることなく、そこに忠実に自分の思いと力を注いでいったという話です。

神の国の原理は、大きなビジョンを描いて、大きな信仰で大きな働きをするっていうことも大切です。

しかし、イエスさまが根本的に重んじられていることは、

「託された小さなみことば、与えられた小さいのち、主から賜った神の愛を軽んじることなく、小さな単純なことに対しても日常的な積み重ねの中で、それを尊び、それに忠実であれ」

これこそが神の国を待ち望んでいる、私たちの生き方だと教えてくださいました。

イエスが求められているのは、

小さなことでよい。しかし主から託された小さなことに忠実であれと。

すると、それが自然に増えていくと。

試練を通して増えていく。時と共に増えていく。

イエスさまは「神の国」をたとえて、「それはからし種のようなものだ」と仰いました。（\*\*\*マタイ 13:31～32）

初めはからし種のように小さい。でも、やがて木が生長して、鳥が巣を作る程の大きさになる。

それと同じように、わたしがあなたに与えた信仰というものは、からし種のように小さい。

「1 ミナの信仰、1 ミナの恵み、それを生かしていこうと思うならば、それは小さいことには決して終わらない。

種の中にはいのちがあり、あなたに託した信仰、あなたに託した愛の中にはとてつもない大きなエネルギーが込められている」

と、イエスさまは仰っておられるのですね。

3) ここで失敗をした者に目を留めて終わりにしたいと思います。

20 節ですね。（ルカ 19 章の） 20 節から一緒に読んでみましょう。

20 また別のしもべが来て言った。『ご主人様、ご覧ください。あなた様の一ミナがございました。私は布に包んで、しまっておきました。

マタイの福音書の「タラントのたとえ」では、地面の中に埋めておいた。  
何か布に包んでおいた100万円の束一つですと、布に包んで大事にタンスの中に入れて  
おいた（笑）という感覚なのだろうと思いますね。  
その理由が21節に書いてあります。この理由はマタイの福音書と同じです。

21 あなた様は預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取られる厳しい方  
ですから、怖かったのです。』

これもマタイの福音書と同じですね。  
神の愛を知らぬ者ですね。  
イエスさまは、私たちが成功するか失敗するか、それに応じて報いを与える——そんな話  
をしているのではないのです。

この人物は主の、主人の愛がわからなかった。  
失敗することを恐れていた。  
託されているものを用いるよりは、布に包んでしまっておくことを選びました。  
失うことはないと思ったのでしょう。でも結果失ってしまいます。

24節を見ていただきますと、19章の24節に——

24 そして、そばに立っていた者たちに言った。『その一ミナをこの者から取り上げて、十ミ  
ナ持っている者に与えなさい。』

とありますが、こういうことを言われる前に、彼は一ミナを既に失っていたわけです。  
何しろ布に包んでしまい込んでいるわけですから、それは無いのと同じですよ。

もし私たちが与えられたみことばを、大切に布に包んでしまい込んでいるなら、  
もし私たちが受けた洗礼という恵みを、大切に布に包んでしまい込んでいるなら、  
それは無いのと同じだと。  
どうということか？  
彼は一ミナを託してくれた主人の信頼も期待も軽んじるかのように、「自分大事の人生」を  
送ったということに尽きてしまいますよね。  
「自分大事の人生」——それは普通の人生だと思ってもいいのかもしれないですね。  
私たちは皆自分が大事です。  
ですから、神さまから託されたみことばの価値も、信仰の意味も、真剣に捉えていない。  
神さまから受けた愛と恵みの大きさも、自分が救われたという尊さも、真剣に受け留めて

いない。

そして日常の生活の中で、信仰という部分は、愛という部分は、恵みという部分はきれ〜いに布に包んでしまい込んで、後は自分大事の人生を送って行くというのは、イエスさまが仰るには、神の国を待ち望む人の生き方ではないよと。それはこの世にあって幸せになりたい、という人の人生かもしれない。でも少なくとも「神の国を待ち望む」——そういう人の生き方ではないよと。

トルストイの有名な話で終わりにしたいと思いますが、ある町に二人の男がいました。一人は真面目な男、一人は風来坊的な性格。

二人とも、もう人生の後半でありました。人生の後半、ある時思い立って、そうだ、二人で聖地への巡礼の旅に出かけよう。わしらにとって、人生そんなに長くない。ここら辺で、まだ一度も行ったことがない聖地への巡礼の旅に出かけよう。そして二人の内、どちらが先に辿りついて、無事に帰って来られるか、これを競争してみよう。二人は別々の道に出かけて行きました。

真面目な老人はスケジュールを決めて、毎日、毎日、決まった時間を歩いて、ほぼ予定通りに聖地に着きます。ある意味で「ほんの小さなことに忠実であった」人物の生き方ですよね？で、この真面目な老人は、風来坊的な性格の人物を「あいつは、少々遅れて来るだろう」と待っていました。ところが待てど暮らせど来ないんですよね。

そこで真面目な老人は、自分の故郷に帰ります。そして、帰ってみますと、風来坊の老人が何とそこにいるではありませんか。彼が言うには、  
「自分はしばらく旅を続けていた。ある町で宿を取った時に、そこに貧しい子どもたちがいた。  
またしばらく旅を続けて宿を取ると、そこで孤独な老人に出会った」  
彼は、なんだかんだ時間を使い、お金を使い、とうとう聖地を諦めて、そして元の町に帰って来たというわけですね。

真面目な老人も帰って来て、そして言います。  
「なんだ、やっぱりおまえは来なかったな。どうしていたんだ？」

風来坊の老人は、色んな事情を説明して、

「俺はやっぱりこんなもんだ。聖地なんかに行くには程遠い」

と言うわけですがけれども、それを聞いた真面目な老人は、深々と考えて言うわけですね。

「ああ、聖地を見て来たのはわしの方ではなく、おまえさんの方だったかもしれない。

わしは一体何を見て来たのか？本当の旅をしたのはおまえの方だよな」

とこう言うわけです。

「ほんの小さなことに忠実で」という時に、小さなデボーションを忠実に守り、そして礼拝を忠実に守り、そしてそれ以外のことは何もしない（笑）というのであれば、それは所詮「自分大事の人生」と何ら変わりはないですよ。

「わたしがあなたがたに平等に与えた信仰、救い、洗礼、神の愛、それをもう少し大胆に捉えて、使ってみたらどうだ？」と（イエスさまは仰る）。

「それは使わない限りは増えないぞ。布に包んでしまっているんだったら、失ってしまったのも同然。

それは神の国が到来した時に、何ら報いがない、だけではない。

そもそも今の日常の世界で、既に神の国から程遠い人生をあなたは送っている」

と言われたら、私たちの祈りは、

「主よ、どうか、託されたミナを使わせてください」です。

「私たちにほんの少しの勇気を与えて、たまにはからし種一つの信仰なんですけれども、この種の中には莫大なエネルギー、神のエネルギーと可能性が秘められているということを心に受け留めて、主よ、どうか、この種を生かすことができますように（笑）。

この信仰を生かして、自分の人生、周囲の人々のために用いることができますように」

と言う時に、

「ああ、それこそ神を待ち望む人の生き方だね」と、「神の国を待ち望む人の人生だね」

とイエスさまは仰ってくださいと思います。

☆お祈り——藤本牧師

17……『……おまえはほんの小さなことにも忠実だったから、十の町を支配する者になきなさい。』

（ルカ 19：17）

愛するイエスさま、私たちはあなたからいただいたものを、ほんの小さなことと考えることがありませんように。この世の中から見たら小さな信仰かもしれません。僅かな知識かもしれません。今のこの世界にあって、私たちがいただいた救いというのは、まだまだ大きな枝を張っていない程のものかもしれません。でもそこにもし私たちが心を込めてエネ

ルギーを注ぐなら、その内側に宿っているエネルギーが開花し、一ミナが十ミナとなる。

私たち、この教会に一体幾つのミナが与えられているんでしょう。それがさらに大きく開花し、皆で神の国を待ち望むことができますように。そしてどこかで「自分大事の人生」から解放されていくことができますように、私たちにさらに信仰を増し加えてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。